令和５年度（２０２３年度）　第２回東海市不登校対策協議会　会議録

１　日　時　　令和５年（２０２３年）１０月１１日（水）
　　午後２時から午後３時
２　場　所　　市役所６０３会議室
３　出席者　　東海市医師会理事　　朝倉　直子
　　主任児童委員　　菊本　裕也
　　知多福祉相談センター児童福祉司　　柘植　優奈
　　日本福祉大学　教育・心理学部教授　　鈴木　庸裕
　　東海市立富木島小学校長　　杉江　　桂
　　東海市立加木屋中学校長　　伊藤　雅登
　　東海市立上野中学校生徒指導主事　　木原　啓裕
　　女性・子ども課主任　　木村　智明
　　健康推進課　主任指導保健師　　大串　文子
４　傍聴者　　なし
５　事務局参加者
　東海市教育委員会　教育長　　加藤　千博
　　学校教育課長　　桜井　正志
　　学校教育課　主任指導主事　　明壁　啓純
　　〃　　指導主事　　大石　慎也
　　〃　　指導主事　　髙橋　民子
　　〃　　統括主任　　永田　紀子
　　適応指導教室　ほっと東海
　　教育相談員　　武田　基二
　　教育相談員　　深谷　公子
　　スクールソーシャルワーカー　　飯田　彩花
　　スクールソーシャルワーカー　　西　　実莉
　　スクールソーシャルワーカー　　甲斐茉奈美
６　会　議
　⑴　教育長あいさつ
　⑵　会長あいさつ
　⑶　協　議
　　ア　子どもの自立と未来を語る会及び青空教室について
　　（指導主事より資料に基づいて報告）
　　「子どもの自立と未来を語る会」の結果
　　〇不登校傾向の児童生徒とその保護者、関わる教職員等を対象に、東海市小中

学校校長会研究部の進路指導部が、８月５日（土）に東海市勤労センターで開催した。中学卒業後の進路先だけでなく、自立のための道筋について具体的に見つめたり考えたりすることを趣旨としている。

○参加者は７７名で、東海市の生徒・保護者・教職員等は７３名であった。不登校傾向の生徒やその保護者に対して広く周知に努める一方、広い会場を用意したり、不登校傾向の生徒が多く通う学校の情報が１冊にまとまった資料を用意して配付したりするなどして、開催を果たすことができた。

○ほっと東海に通級した高校生や大学生、子供が不登校を経験した保護者、スクールカウンセラー、社会福祉協議会職員をパネラーとしたパネルディスカッションを行った。その後、進路指導主事からＱ＆Ａを交えて不登校傾向の生徒の進路状況等について説明した。また、その後に個別懇談会を開き、パネラーや各校の進路指導主事と懇談することができた。

○「不安や悩みを抱えている参加者にとって、同じような経験をもつ方の話を聞いて、思いを共有したり励みになったりする機会を作るためにも本年度のようにパネルディスカッションの時間を十分に確保すること」「入試制度や中学卒業後の進学先の学校に関してより分かりやすく情報提供すること」ができるよう、来年度へつなげていく。

「青空教室」の結果

○不登校傾向にある児童生徒が、若狭湾の雄大な自然と触れ合うことで活動のエネルギーを充電し、参加者相互の交流を図り、新しい一歩を踏み出すことを目的に、国立若狭湾青少年自然の家で、２泊３日の日程で行った。

○２３名の申込みのうち、小学生３名、中学生１４名の計１７名が参加することができた。ボランティアは東海市で募集した大同大学１０名と若狭湾のボランティア９名が参加した。事前に行った交流会を通して親しくなった参加児童生徒の様子を踏まえ、お兄さんお姉さん的な立場で３日間一人一人に寄り添ってサポートし、「チャレンジしよう」とする気持ちを後押しした。

○３日間、天候に恵まれ、予定していた活動を全て実施することができた。事前に若狭湾青少年自然の家と綿密な打ち合わせを重ね、３日間を安全に活動できるように努めた。活動を通して、それぞれの児童生徒が自信をつけるとともに、エネルギーを蓄えることができた。

○不登校児童生徒及びその保護者に向けた青空教室開催のより広い周知と、学生ボランティアの確保が課題である。

イ　不登校傾向児童生徒の状況について（非公開）

ウ　ＳＳＷの活動の状況について（非公開）

エ　適応指導教室について

（教育相談員より資料と実例に基づいて報告）

○本年度９月２日までに入級手続きをした児童生徒は、横須賀教室で２０名、上野公民館教室で１９名である。昨年度の同時期よりも入級の数が増えている。

○学習は個別指導を基本とし、相談員、サポーターが児童生徒と会話をしたり、レクリエーションをしたりして、安心・信頼の関係づくりを心掛けている。

○一日を通して在室する児童生徒は少なく、午前か午後の１～２時間の学習をして帰宅する児童生徒が多い。そのなかで、保護者や本人と相談したり、昼食後の交流を楽しみにしたりして、滞在時間が伸びたり通級回数が増えたりする児童生徒も少しずつ増えてきた。また、個別のニーズに応じた支援を受けることで落ち着いて学習できる児童生徒もいる。

○異年齢集団での交流の場を通して、コミュニケーション能力を養おうとしている。

○コロナ禍が明け、３年ぶりに会食会を実施できた。文化活動の充実を図っており、選挙の出前講座やギター教室などを企画している。たくさんの方の協力に感謝している。

○不安感を抱えている児童生徒が多いので、様子を見ながら個別に相談活動を取り入れ、不安に対する対処方法について一緒に考えるようにしている。

○学校との連携を密にし、児童生徒の状況に応じて行事や得意な授業への参加を促し、登校支援を行っている。

○「ほっと東海」に入級したことや通級したことを大切にして、「ほっと東海」と学校と家庭を連携していくことが願いである。

○週末には、「ほっと東海」での出席数や子どもの様子を学校に報告している。学校の先生方は、その報告を上手に活用していただき、「ほっと東海で頑張っているね」などの声かけをしてくださっている。

○「ほっと東海」では、異学校、異学年の児童生徒同士でコミュニケーションがとれるよさがある。

オ　主な意見

○子どもの自立と未来を語る会に参加させていただいたが、パネラーの方が「ほっと東海に少しでも行けるなら行っておいた方がいい」「学校に行けなかった時にスマートフォンをずっと触っている自分にこのままではまずいと思った」「参加された皆さんも絶対に大丈夫です」そんな言葉に参加された子供たちも安心できたと感じた。

○子どもの自立と未来を語る会に来られなかった方たちのために、そこで語ら

れたことをダイジェスト版などで、言葉として見返すことができるようにしていってはどうか。

○中学校では、１学期にがんばっていた生徒に疲れが見え始めてきており心配している。しかし、昨年度のコロナ禍に比べると、小さな理由で休む生徒は少なくなった。コロナが５類となり、考え方が変わってきている生徒もいる。

○子どもたちにとって、学校が楽しく、毎日学校へ行こうという気持ちになるような行事や授業づくりをしていかなければいけない。

○個に応じた別室を用意したり、適応教室に通ったり、場合によっては、自宅であったり、いろいろな居場所づくりを検討していき、不登校の数の多い少ないに一喜一憂しない方がいいのではないか。

○不登校の子どもの中には、子ども自身の問題ではなく、保護者の方が精神疾患や障がいを抱えておられ、登校できない子どももいる。

○小学校の低学年で学校に行けない子どもたちは、学校のよさや体験学習の楽しさを知る機会が減ってしまうので、早めに対応していく必要がある。

○学校現場にも福祉が入っていく必要があると感じている。

○１年生２年生の時には学校に行けていて、その後不登校になった子どもに比べて、もっと早い段階から学校に行けなくなった子どもは、学校のよさや体験学習の楽しさを知ることができない。そういったところからも、学校にどんどん足が向かなくなってしまうことを危惧している。

○知多児童相談センターも不登校の相談が増えてきており、その際は、学校やＳＳＷにつなぎ情報共有に取り組んでいる。子どもたちは、ＳＳＷに話を聞いてもらうことで、悩みなどを相談しやすかったり、精神疾患を抱えた保護者の方もＳＳＷとの時間が気分転換になったりしている。

○発達障がいの子どもやその疑いがある子どもがどんどん増えており、支援がつけられないほどの相談がある。

○子どもも親も常に緊張感を抱えていたり、夫婦で会話がなかったり、家庭の中でコミュニケーションがとれなかったりなど健康ではない状態の家庭が増えてきている。そんな状況や環境の中で、子どもたちがどのように育っていくのだろうと心配な家庭がたくさんある。家庭という土台がしっかりしていない中で、学校や勉強という状況にはならない。

○健康推進課では、就学前の子どもたちや家庭と関わっている。虐待等、心配な子どもや家庭が就学後にどのようになっているのか全く分からない状況になってしまう。就学後も学校教育課や子ども女性・子ども課と連携を図り、ケースの情報共有やケーススタディを行っていきたい。そのような機会に、健康推進課では、就学前にどのような関わりをもち、どのように支援して小学校に送り出す必要があるのかなども考えていきたい。

○親の価値観で子どもは育っている。近所の人や地域の人との関わりも希薄になり、いろいろな価値観に触れ合うことが失われている。

○学校の先生方だけでは子どものケアをしきれない。子どもたちは心のケアを求めているため、学校現場に違う職種や福祉等が入っていく必要がある。

○子どもが不登校になるということは、家族で会話が失われたり、親が体調を崩したりなどとても大きな出来事なのではないかと感じている。

○本会議のいろいろな報告の中で、数値や一文だけでは表すことができない一人一人違った不登校の要因や背景があるのだと感じた。

○幼保小、小中の連携については、しっかりと子どもや家庭の情報共有を行うとともに、引き継ぎの時期ついては、教育員会や学校職員も人が入れ替わる時期と重なるため、つなぎ目のサポートの有り様について検証していく必要がある。

○別室という呼び名も、改めてはどうか。そこを居場所としている子どもたちにとっては、そこが本室である。また、個別性の高い子どもたちへの対応ほど、学校全体で情報の共有と理解が必要である。